

「主イエスの埋葬」

2014年12月11日

マルコによる福音書 15章 42節～47節。既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。そして、百人隊長に確かめろと、遺体をヨセフに下げ渡した。ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。

主イエスは午後3時に息を引き取られた。十字架刑は6時間で終わった。3時間後には、何の労働もしてはならない安息日が始まる。この時、アリマタヤ出身で身分の高い議員のヨセフという人が総督ピラトの所に行き、主イエスの遺体を引き渡してくれるように願い出た。ヨセフは最高法院の71名の議員の一人であった。身分が高く、裕福な人であったことは確かである。ヨハネ福音書は、ヨセフについて「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人を恐れて、そのことを隠していた」と記している。主イエスに深い敬意を抱いていたことも確かである。十字架刑に処せられた者は刑場に放置された。ヨセフは「勇気を出して」遺体を引き取りたいと願い出た。勇気がいったらう。遺体を引き取れば、主イエスの仲間と見なされ、自分の身に危険が及ぶからある。ヨセフは身の危険を冒してまでも、主イエスの遺体をなぜ引き取りたかったのか。彼は主イエスに敬意を抱き、主イエスの遺体が刑場に放置され、野犬や野鳥の餌食になることに耐えられないと思ったからである。ルカ福音書に「善良な人で、同僚の決議や行動には同意しなかった」と記している。前夜の大祭司の庭で行われた最高法院の裁判に、正しくは降格儀式に、ヨセフは賛同できなかった。しかし、議場は主イエスの死刑判決に口をはさむことができないような状況で決議されていった。ヨセフは異議申し立てをしたかったけれども、怒涛のように押し流す議場では沈黙するだけだった。ヨセフは一言も発言できなかったことを悔やみ、良心が咎めた。敬意と慙愧の思いが重なって、引き取る決意をしたのであろう。

ピラトは、ヨセフの申し出を受け、主イエスが6時間で息が絶えたことを不思議に思った。十字架刑は普通、数日間、苦しみ抜いて死ぬからである。ヨハネ福音書は、主イエスの左右につけられた男の足の骨を折ったと記している。二人はまだ生きており、足の骨を折って、痛みでショック死させたのである。ピラトは、主イエスの死を確かめ、遺体をヨセフに下げ渡した。ヨセフは主イエスを十字架から降ろし、亜麻布に巻いて、岩に掘った横穴式のまだ誰も葬られたことのない墓に納め、入り口に石を転がして閉ざした。裕福な人は岩の横穴式の墓に納めた。庶民は土葬であった。土葬された場合、主イエスの復活の出来事は起こり得ない。ヨセフの墓への埋葬の行為が復活を可能にしたのである。ヨセフの功績は計り知れないと言える。ヨハネ福音書は、この埋葬に、夜、そっと主イエスに教えを乞いに来たニコデモが没薬と沈香を混ぜた物を持ってきて、共働したと記している。ニコデモも主イエスに深い敬意を持っていた。

マグダラのマリアとヨセの母マリアは、主イエスの埋葬の場所を見届けていた。彼女たちの目は終始、主イエスに向けられ、彼女たちが復活の最初の証言者となった。